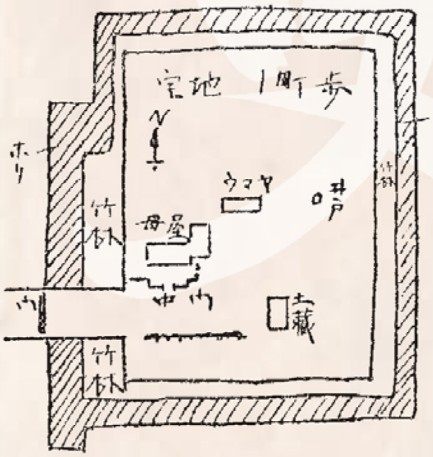
俊寛たちがやってきた街

江戸時代の一七八二年、京都の医者、橘南渓が薩摩藩内を旅行しています。その時に見聞きしたことを『西遊記』という本にまとめました。当時、広く読まれ、今風に言えばベストセラーになったようです。その本の中に、隼人町の宮内地区にいる「留守」さんのことが出てきます。留守さんは、桑幡・沢・最勝寺さんとともに、社家といって代々、鹿児島神宮に係わる仕事をしてきた人です。留守という名前は、留守職という仕事の名前からきたもので、全国でも二〇〇軒ぐらいしかないといわれています。元々の名前は、「紀」といい、京都の岩清水善法寺から大隅正八幡宮（今の鹿児島神宮）の仕事をするために派遣されています。

平安時代の終わり、一一七七年に、俊寛、藤原成経、平康頼の三名が、平家打倒の計画が漏れて捕まり、鬼界島（硫黄島）に流されました。いわゆる鹿ケ谷事件です。この時の留守さんに関するエピソードが、『西遊記』（一七九八年刊行）に書かれているのです。

留守さんが位をもらうため京へ登った時、平康頼の奥さんがこっそり訪ねてきて、「大隅の国は鬼界島（硫黄島）に近いと聞いています。この世の思い出にその島に渡って、夫に一目でも会いたいと思って、こうしてわきまえもなく訪ねてきました」と述べました。これに感じ入った留守さんは、船にこっそりかくまって宮内に連れてきました。しかし、船出することができないうちに、一年近くがたってしまいました。程なく罪を許された康頼と成経の二人は京へ帰ることになり、その途中、鹿児島神宮にお参りをしました。留守さんはもう隠しておく必要はないということで、康頼を自分の家に招いて夫婦を対面させました。この時、俊寛は一人許されず、鬼界島で亡くなっています。



隼人町見次　留守氏宅配置図
（檪山 1949を一部改変）

桑幡さんのところにも似たような話があり、あの有名な『平家物語』という本に桑幡さんの先祖の話が出てきます。『平家物語』にも「延慶本」や「長門本」などいくつかあり、そのうちの「長門本」に載っているのです。桑幡さんの第五十三代清道という人が、平清盛の屋敷に出入りしていた時、藤原成経の恋人、伯耆局を見初めて、同じように宮内に連れてきた話です。伯耆局が成経をずーっと待ち続け、亡くなったのが国分姫城の「こがの森」といわれています。

俊寛たちが鬼界島に向けて船出をしたのが隼人町清水の鳩脇八幡崎という港からで、康頼・成経の二人が罪を許され戻る時もこの港でした。

桑幡・留守さんの屋敷は何度か発掘調査が行われました。その結果、桑幡さんがおよそ千年前から住んでいることなどいろいろなことが分かってきました。また、このような社家の屋敷は、戦国時代には、一辺がおよそ百メートルの四角い形で、まわりに深い堀をめぐらし、高い土塁（土手）を築いて防御を固めていたことが明らかになりました。

桑幡さんの屋敷では、平成十二年度に幅が四メートル、深さ三メートルの「V」字形の堀跡（薬研堀）が見つかっています。北側の門のところには今も土塁が残っています。

留守さんの屋敷でも幅六メートル、深さ四メートルの堀が見つかっており、屋敷の西側には、幅十一メートル、高さ三メートルの土塁が今でも四十メートルも残っています。このような屋敷の中では、国内の焼き物だけではなく、中国や朝鮮、東南アジアのタイ・ベトナムなどの焼き物もたくさん見つかりました。タイ・ベトナムの焼き物は今から四百年前のものでした。舶来品を手に入れていたのです。

大永七年（一五二七）に、本田氏が島津氏と争っていた時、鹿児島神宮一帯を焼いたことが記録に残っています。その時、社家の人たちや弥勒院のお坊さんたちが立て籠もって戦っています。土塁や堀を築いて厳重に守りを固めるのは、そういう時でしょう。

鹿児島神宮は、鎌倉時代の初めごろには大隅国の半分を領土に持ち、大変権威のある神社でした。宮内地区には、その神宮を中心として、弥勒院（今の宮内小学校の場所）、弥勒堂、正興寺、正高寺、正国寺などのお寺、そして桑幡さんを始めとするたくさんの社家の館が配置されていました。鎌倉時代・室町時代の中世には、政治的・経済的・文化的、そして宗教的中心地だったのです。

文責＝重

【郷土史への扉】